

月刊

地域保健



●特集

災害時要援護者の支援はどう進められたのか
東日本大震災における福祉避難所の設営と民間支援

●フロントランナー 加納恵子さん《広島市健康福祉局保健部保健医療課 保健指導担当課長》

●ピープル 高木慶子さん《上智大学 特任教授、上智大学グリーフケア研究所 所長》



加納恵子

さん

● 広島市健康福祉局保健部保健医療課 保健指導担当課長

広島県広島市

「昔は良かった」で済まさずに、今の保健師の良さを探そう

人が好きなら心は折れない。



あの、りりしい女性は誰？

加納さんが中学2年生のとき、そんなひなびた町に若くて美しい女性がやってきた。

その人が座つていただけで周囲の雰囲気がやわらぎ明るくなる——職場の上司にはそんな太陽のような人がいい。今月のフロントランナー、広島市の加納恵子さんはまさにそんな人柄だ。

出身は温暖な気候の瀬戸内海に浮かぶ山口県周防大島町。「高齢化日本一の島」として有名な土地だ。

「祖母が結核の治療をしていたので保健師が家庭訪問に来たのです。私はたまたま家にいて、ばったり会ったのですが、母と話している姿が明るくテキパキとしていて、直感的に『いいなあ』と憧れました。そのときに初めて保健師という仕事があることを知りました」

島から出て、初めての大都会暮らし。4人部屋の寮生活では同級生2人と先輩2人から、いろいろなことを教えてもらい、門限破りとしてはよく先輩に叱られた。週末は男子大学生たちと一緒に「合ハイ」（合同ハイキング）に出かけるなど、しょっちゅう出歩いていたという。

「私が生まれたのは合併前の東和町」という所。ものすごい田舎で人家は100戸くらいです。当然、顔見知りばかりで、知らない人が町に来ると、「あの人は誰だろう」と町中が興味を持つような地域でした。中学校は島からさらに数百メートル離れた沖家室島

まだ進路も分からぬ中学1年生。思春期の純な心にりりしい保健師の姿は鮮烈な印象を残したのだろう。加納さんはこのときから将来は保健師になる希望を抱き始めた。ただ、戦前生まれの両親にとつては看護職といえば3Kのイメージが強く、猛反対したらしい。

卒業後は地元に近い広島県立看護専門学校的公衆衛生コースへと進んだ。両親が看護学校進学で折り合うときに「就職は地元で」という条件をつけた

た

豊島看護専門学校に進学した。

P18 要介護度により福祉避難所を分けて対応

【宮城県石巻市】

◎文・写真 西内義雄（医療・保健ジャーナリスト）

P28 福祉避難所内に総合相談窓口を設置

【宮城県東松島市】

◎真籠しのぶ（東松島市地域包括支援センター）

P34 地域包括支援センターの活動から

【宮城県南三陸町】

◎高橋晶子（南三陸町地域包括支援センター）

P40 陸前高田市の福祉避難所を開設して

【チーム勝山の支援活動から】

◎櫻井陽子（福井県勝山市）

P46 日本障害フォーラム（JDF）ならびに関係団体の支援活動について

◎原田 潔（日本障害フォーラム（JDF）事務局）

P52 自助、共助、そして他団体との協力で生き抜いた

【日本ALS協会の取り組み】

◎安田智美（日本ALS協会福島県支部）

P60 陸前高田市での個人ボランティアの経験から

◎松本美代子（言語聴覚士）

P63 子どもの発達支援を考えるSTの会の取り組みから

◎小野寺清栄（言語聴覚士）

災害時要援護者の支援はどう進められたのか

東日本大震災における
福祉避難所の設営と民間支援

想定を遥かに超える規模となった東日本大震災では、沿岸部の多くの自治体で行政機能が混乱し障害者や高齢者などの災害時要援護者に対する支援活動は困難を極めた。福祉避難所も当初契約していた施設が使えず、新たに設営を迫られたところが多い。津波の被害を逃れた災害時要援護者に対する支援活動は、その後どのように立て直されたのか。自治体の事例を紹介するとともに、行政の働きを補った民間支援について取り上げる。



昔ながらの 地域に根付いた活動を

保健師の夢をつかんだ「ひよこ2年目」
の展望

やまうら りえ
山浦利絵さん

●唐津市保健福祉部保健課



▲保健センターのすぐ近くにあるのが観光名所の唐津城

文・写真 西内義雄（医療・保健ジャーナリスト）



三人姉妹の長女で、小さなころから「手に職をつけなさい」と言われていた今回の主人公は、山浦利絵さん。地元唐津市のイチゴ農家に生まれた29歳だ。

「おかげで妹たちも准看護師、保育士と資格を取つて働いています。私も幼いころはお花屋さんとか考えていましたが……」

特に母さんが資格を取ることを強く勧めたようだ。

「自分自身が食べていいけるだけの力をつけてたほうがいいというのが母の口癖でした。母は20代の早いうちには結婚してから農家の嫁となり、毎日とても忙しく働いていましたから、とくに資格に対して強い思い入れがあったのだと思いません」

思い浮かんだのは医療職だった。実は山浦さんは兄がいて、小さいころに亡くなっていることも影響している。ただ、それはまだぼんやりしたもの

のでしかなかった。

中学ではバスケット部に入る一方、母の強い勧めで塾通いもして、毎日のように帰宅が午後11時になっていた。成績は常にトップクラスを維持し、地元の進学校に入っている。もちろん、大学進学を強く意識していたからだ。

「当時は化学が好きで、研究員になりたいと思っていました。中3くらいからお化粧にとても興味があり、化粧品会社の研究員とか、薬剤師に憧れを持つていました。学部も理学部などを考え、看護はまだ意識していなかつたです」



▲農家の長女として元気に育った